

千木の片殺」の意味について述べよ

テキスト本論ではまず、源平盛衰記の「住吉諏方両神」に於ける「枉ハ千木ノ片殺神寂」の用例を採り上げており、次に延慶本平家物語の「御宮造神サヒテ行合間霜厭給フ」の類文を含めて、新古今和歌集卷十九神祇歌

夜やさむき衣はうすき片そぎの

ゆきあひのまより霜やおくらむ

住吉御歌となん

に目を転じ、盛衰記の用例は、この歌を踏まえているとされている。更に卷十二恋歌、崇徳院に百首歌奉りける時に詠まれた大炊御門右大臣藤原公能の

わが恋は千木の片そぎ難くのみゆき逢は

で年の積もりぬるかな

を引き合いに出している。この公能の歌は、先の住吉御歌を踏まえている事が日本古典文学全集本の新古今和歌集の頭注にも見えるが、公能が踏まえる元となった住吉御歌の「片そぎ」の意味合いと、公能が百首歌を詠んだ久安六年（一一五〇年）の年代での意味合いが果たして同一であったのかと言う点での問題提起を行っている。

そこで新古今和歌集のそれぞれの注釈書を踏まえて、「片そぎ」の語義について検証を行っている。塩井政男氏の新古今和歌集詳解を引用し、住吉神詠の「かたそぎ」とは、千木の上の一端を削ぎてあるを言ふなれど、ここにては、直ちに、千木の代りに用ひたるなり。千木の行き合ひの間とは、千木の交叉するあひだといふ意にて、

屋根棟などの壊れて隙間のあるを言はれしものなるべし。」の説明が現在に至るまでほぼ定説となっている。千木の片殺」語義解釈となっている。果たして、この語義解釈が何時の時代にまで遡れるかについて、新古今注がカタソキ作ト云う事、社頭ノ作ヤウニア

とするのみで参考にはなり難いのに対して、新古今集聞書には、

かたそきとは、社たんのむねに、かたなのはのやうにかたそきにしてい、うちかへてゆふ木也。又、ゆきあひのまとは、杉いたのやうにふきたるをいふ也。

とある。少なくとも細川幽斎の時代までは、刀の刃のやうに片そぎにされた木が二つ組みあわされたと云う解釈が遡り得る事が判る。しかし、同時に「ゆきあひのま」については、テキストの著者が指摘している様に住吉神詠を踏まえるとその刀状の千木が組みあわされている「ゆきあひのま」となれば、歌の意味が通りにくく、ここでは、「杉いたのやうにふきたるをいふ」と独自説を加えている。また、こうした解釈史を見る限りでは、果たして公能が「わが恋は千木の片そぎ難くのみ」と詠んだ際に、果たして「片そぎ」の意味を、中世後期以降の「片そぎ」の語義理解に基づいて詠まれたものかの疑問点が出てくると指摘している。

ここで神社建築史の立場から「千木の片そぎ」に関して、福山敏男氏による「住吉大社」を次の様に引用している。

本殿の千木は平安時代以来、歌に詠まれて名高い。
「千木の片そぎ」というのは、一説のように千木の
上端の縦横の切り方を指すのではなく。千木二本を
組みあわせる時にあい接する面を削り取るからであ
る。奈良時代に本殿が荒廃した事を嘆く神歌として、
夜や寒き衣や薄きかたそぎの行きあひのまより霜
や置くらん」というのが伝えられている。これは千
木の交点に隙間が出来るくらいに建物が荒れて殿内
に寒い風が入ると云う意味であるから・・・

福山説によると、片そぎは、二つの千木を組みあわせ
る交点の加工形態の事を指す。住吉神詠歌の本来の意味
は、千木の片そぎの隙間が開く程、建物が荒廃した神寂
びた有様を示すと云う意味合いになり、中世期後期から
続いて来た「千木の片そぎ」解釈を覆す事にもなりかね
ない。テキスト本論では、この説を採る事で、住吉神
詠は明快に解釈出来る」としている。更に公能歌も、こ
の様な解釈に基づいて詠まれているのでは無いかと推論
されている。俊頼髓脳には、「片そぎといへるは、神の
社の棟に、高くさしいでたる木の名なり。」とあり、八
雲御抄には、「かたそぎ、ちぎはおなじもののよし、範
兼説也。社のつまにかたのさきのやうなる木也。」等と
俊頼以来、「かたそぎ」は、大体、千木のことと考えら
れていた。俊頼髓脳の著者、源俊頼（二〇五五―一一二
九）の歌集散木奇歌集には、

百首歌に霜をよめる

住吉のちぎのかたそぎゆきもあはで

霜おきまがふ冬はきにけり

とあり、「ちぎのかたそぎ」を歌作に用いた最初のも
とされている。それが久安六年に公能が「わが恋は千木
の片そぎ」の歌を詠んだ段階では恋歌として「咎うべき
ものが逢えない」意を強調する手段として「千木の片そ
ぎ」が引き合いに出される様になるが、この場合でも本
来の「片そぎ」の意を考えれば歌のイメージはかなり異
なってくる。更に寂連法師が出雲大社を訪れた時に詠ん
だ歌

出雲の大社にまうで見侍りければ、あま雲たな
びく山のなかばまでかたそぎの見えけるなむ、
このよのこととはおぼえたりける。

和ぐる光や空にみちぬらん

雲に分け入るちぎのかたそぎ

では、「かたそぎ」と「ちぎのかたそぎ」を同一視する
八雲御抄の以下の歌学書に見られる解釈に倣うものとな
っていることは云うまでもない。

最後にテキストでは、「片そぎ先端説」の出所につい
て、伊勢神道の「宝基本記」を挙げ、伊勢神宮の外宮と
内宮とで先端の「かたそぎ」の形状が水平と垂直に区別
される流儀の影響も早い時期に加わり、近世以降の解釈
につながっていた可能性も示唆している。

テキスト本論では、源平盛衰記に始まり、新古今和歌
集の住吉神詠歌、公能の恋歌を含めた解釈を検討する事
で、「片そぎ」が本来は、二本の「千木」を組みあわせ
る際に片側が削り落とされた結合部分であったのが、中

世後期には、「片そぎ」と「千木」とを同一視する解釈が発生し、更に後の時代になって、伊勢神道等の影響を受けて、「片そぎ」先端説に変化していった有様を具体例を挙げて説明している。

テキスト本論の展開に於いて興味深いのは、既に「片そぎ」の解釈が「定説化」している事を覆す事が出来る様な着想点については、やはり「源平盛衰記」あるいは、「延慶本平家物語」等の説話文学の類文の注釈や本文読解の作業を通じて得られるものであると考えられ、従来の歌学書中心の理解では、このような観点の転換が難しく、和歌と云うジャンルにとらわれず、広視野から語義を理解する事の重要性であろう。

ここまで、「千木の片そぎ」について源平盛衰記、新古今和歌集及び類歌についての考察と論の展開をまとめたが、若干、私の考え方について述べてみる事にしよう。まず、「片そぎ」用例が見られる和歌を二十一代集から抜き出して見ると、金葉和歌集の俊頼の「すみよしの（ぎし）のかたそき」歌は、「ちぎ」が「ぎし」に変わっているが、これは、ただ単にテキスト校異上の問題では片づけられない点もあるだろう。「片そぎ」≡「千木」との見方が定着してからは、「千木」を「岸」に置き換えても十分に歌意が通じると考えられるからである。

金葉和歌集

（別巻） 初度本にありて底本になき歌）

百首歌の中に霜をよめる 源俊頼朝臣

850 すみよしのぎしのかたそき ゆきもあはて

しもをきまよふ冬はきにけり

また、この歌の場合は、住吉神詠を踏まえながらもむしろ、「霜」を詠む事で季節感を強調しているが、源氏物語若菜下に於ける紫の上の

住之江の松に夜ぶかく置く霜は

神のかけたる木綿髪かも

の歌に見られる通り、住吉社神詠の古来からの伝統として、天から降る「霜」自体に住吉神の神慮の現れとする見方が出来るので、敢えて「千木」を出さなくとも歌の神意性は十分伝わる。

次に恋歌を三首挙げて見る（以下資料参照）と、為忠の歌は、「かたそき」と「あはぬ」が縁語の様に使われているが、この場合は、「斤そぎ」を千木が刀状に加工された形態を表すのでは、「我なれや」と「斤そぎ」を自分に譬えてみても恋歌として意味が生きて来ない事になる。やはりこの場合は、千木の行合の部分を「斤そぎ」にしなければ意味が通じ難くなる。

次に神祇歌を見ると、後鳥羽院御製歌の「露霜」、続後撰和歌集の後鳥羽院御製歌の「かたそきの行あひの霜」と必ず「霜」が詠まれており、住吉神詠の伝統として重要な役割を果たしている。

ところがここで気になるのは、「行き合いの霜」と、住吉神詠の「行合の間より霜が置くらむ」とでは、意味合いが違ってくる事である。「行き合いの霜」の「の」は、明らかに行き合いの部分に霜が降りている事を示している。「行き合い」の「間」よりでは無い訳で、そう

なると既に、後鳥羽院の時代には、「斤そぎ」が行き合
いの交点の接合部を示すのではなくて、「千木」全体を
示す意味に変わってしまったことになる。

この様に勅撰集の類歌を見る上では、「千木の片そぎ」
と「行合」の関係、あるいは「霜」等のキーワードを如
何に捉えるかで意味合いが変わってくる。恋歌について
は、「斤そぎ」と「行き合い」の関係について、「斤そ
ぎ」が「行き合い」の部分、すなわち、接合部分を組み
あわせる為に接合部分を削り取った形態が元々の語義で
あると想定した場合、大きな矛盾無く解釈出来るが、神
祇歌の場合には、明らかな語義の変質が認められる。

「斤そぎ」の意味合いが時代を経て変質して行った要
因として、テキスト本論で示されている様に伊勢神道で
の教義面、もしくは、語義解釈が変わった事が神祇歌に
も反映される様になった可能性もある。

私は、この点について、次の様な仮説を思いついた。
それは、現在の住吉大社の神社建築の「千木」の部分を
見ると、本来は、古来の神明造りの伝統である屋根の骨
組みの交叉する部分が突き出たのを千木と呼んでいたの
が、所謂、「置き千木」の方式に変わっている事である。

現在、「置き千木」を採用しているのは、住吉大社、
出雲大社等の古代から続いて来た格式高い神社の大部分
がそうであるが、一方、古来からの様式を保っているの
は、諏訪大社上社宝殿等が挙げられ、数少ないものの、
古くからの様式を守っている神社建築も見られる。

また、伊勢神宮内外宮等古来からの様式を保っている

とされる神明造りについては、実は、厳格な区別が存在しており、一般に神明造は、正面が三間、柱が四本よって、間が三つ、側面が二間、平入り切妻直線構造で、柱は礎石を地上に見せず掘立とし、両側面に棟木を支える棟持柱（二柱）があり、破風、屋根の流れに沿う端の板（がのびて千木となっている。この中で、伊勢神宮の内宮、外宮に見られる神明造は、平入り直線式（そのまま千木まで伸びた形）となっており、神明造の中でもは最も、純粹・厳格なもので、一般の神明造と区別して「唯一神明造」と呼ばれており、他社では、神宮と同一のものとは造れない事になっている。この為、本来の千木の「斤そぎ」は唯「一神明造」、もしくは、古来の様式を別系統で伝えている大社以外には保つ事が出来ない事になる。

この唯一神明造りが神祇として制定された事を契機として住吉大社等の主要大社の千木が「置き千木」に変わっていったのではないだろうか。それが、どの年代の事なのか、案外、重要な意味合いを持ってきそうである。「置き千木」の場合は、本来の「斤そぎ」が意味を失ってしまうからである。つまり、本来は神社建築の構造の中で重要な役割を保って来た千木が、「置き千木」として装飾化された段階で、和歌やその他文学作品に描かれる千木の姿も変質して行った可能性があるからだ。それが、中世後期以降であれば、新しい論の展開が期待出来るが、今後、更に資料を調査して見る必要がありそうだ。

参考資料 二十一代集収載の「片そぎ」歌

新勅撰和歌集卷第十二 恋歌二

恋歌よみ侍けるに 藤原為忠朝臣

743 住吉のちきのかたそき我なれやはぬ物ゆへ年のへぬらん
続古今和歌集卷第十二 恋歌二

内大臣に侍ける時の百首に、名所恋を 光明峰寺入道前撰

政左大臣

1093 住吉のちきのかたそき年をへてまた行あひもしらぬ恋かな

新拾遺和歌集卷第十三 恋歌三 百首御歌中に 土御門院御製

1100 行あはん程をはしらす住吉の松のたえまのちきのかたそき

続後撰和歌集卷第九 神祇歌

後鳥羽院御製

543 久かたのあまの露霜いく世へぬみもすそ河のちきのかたそき

続後撰和歌集卷第九 神祇歌建保三年五首歌合に、松経年後鳥羽

院御製

560 かたそきの行あひの霜のいくかへり契かむすふ吉の松

玉葉和歌集卷第二十 神祇歌

熊野新宮にてよみ侍ける 中原師光朝臣

2791 あまくたる神やねかひをみつしほの湊にちかきちきのかた
そき

続千載和歌集卷第九 神祇歌

たいしらす よみ人しらす

871 宮居せし 神代思へは かたそきの行あひの霜は年ふりにけり

続後拾遺和歌集卷第十二 恋歌二

平親清女妹

788 思ひわひ祈るも悲しかたそきのゆきあひとをき人の契は

風雅和歌集卷第十九 神祇歌

度会朝棟

2122 かたそきの千木は内外にかはれともちかひはおなしいせの

神風

新千載和歌集／新千載和歌集卷第十神祇歌

從三位常昌

958 いれや此天照神の天地をまもるしるしの千木のかたそき

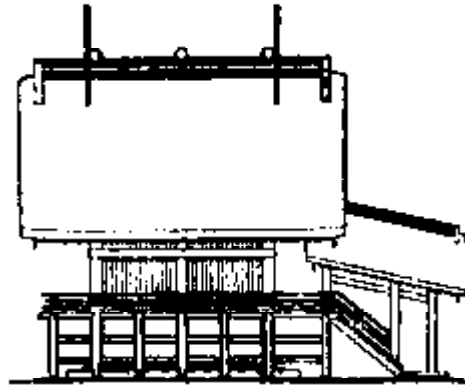
新千載和歌集卷第十神祇歌

貞和二年百首歌めされし時

入道二品親王尊円

992 君か世に行あひの霜の年ふりて千たひもつくれちきのかたそき

置き千木」の構造



側面図



正面図

この様に「置き千木」では、本来の建築構造材としての役割から裝飾的な役割に変質してしまつた。上の図は出雲大社の千木の構造であるが、こうした古式ゆかしい神社でも中世以降の建築様式の洗礼を受けていると考えられる。